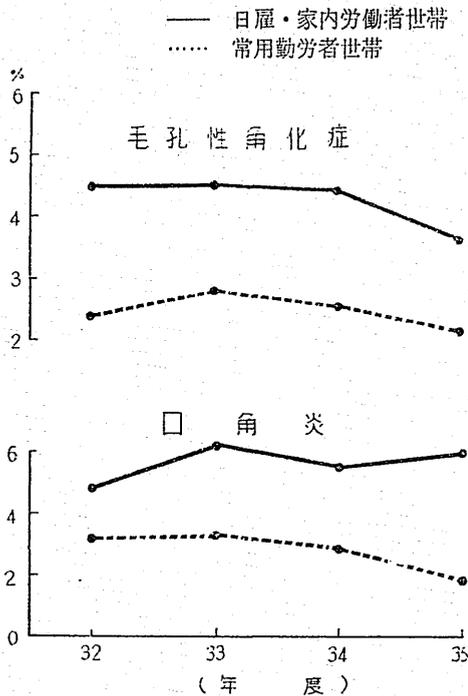


第3図 身体症候の業態別発現率
(消費者世帯細分・5月)



次に5月調査の消費者世帯を細分した結果についてみると、有症率の高いのは日雇・家内労働者世帯で22.9%、次いでその他の消費者世帯の20.8%、事業経営者世帯の19.8%となっており常用勤労者世帯は最も低く17.8%である。

また有症者率の最も高い日雇・家内労働者世帯と、最も低い常用勤労者世帯について症候別に比較してみると第3図のとおり、毛孔性角化症、口角炎など両世帯の間には著しい差異がみられ、日雇・家内労働者世帯の貧困な食生活内容が、ここにもうかがえるわけである。

5. 体 位

わが国民の体位は終戦前後に著しい低下を招いたが食糧事情の好転、栄養改善指導の徹底、体育の進展、学校給食の普及などに伴っておおむね昭和27、28年頃には戦前の水準にまで回復し、その後も順調な足どりで向上している。

このことについては既に前年度の国民栄養調査成績におい

て詳しく述べておいたが、これらの傾向は本年度においても変わりなく身長、体重の対前年の増減をみると、第28表のとおり、青少年の体位は殆んどすべての年令を通じて増加し、特に発育盛りの年令層での向上が著しい。

すなわち身長についてみると男子の11~15才では0.6 cm、女子の11~13才では1.2~1.5 cmの増加がみられ、また体重においても、男子の12~16才では0.6~1.8 kg、女子の10~15才では0.5~1.2 kgと増加しており一段と向上の跡がみられる。

このような伸びは特に女子の場合、戦後でも最も大きな伸長率であり発育盛りの女子の体重がますます向上の傾向にあることを示している。

次に35年度における青少年の成長に伴う身長の増加量について戦前の傾向と、終戦直後の22年に実施した国民栄養調査成績との間で比較検討してみよう。

この35年の成績をみると昭和22年に比べて4~5才、8~9才の2年令を除くと13~14才以下の年令層ではすべて22年に示した増加量をかなり上回っており、最近青少年の発育が非常に盛んになってきたことを示している。しかしながら14才以上の年令は、22年においてはまだ相当の伸びがみられるのに比べ35年では却って伸びが減少し17才ではほぼ成長が停止している。

この様な現象は恐らく戦時中は食糧難によって幼児期に十

第27表 体位の年次推移
男子・13才

		身 長	体 重
		cm	kg
昭 和	22 年	139.6	35.06
"	23 "	140.7	35.53
"	24 "	141.1	36.27
"	25 "	142.0	36.43
"	26 "	142.8	37.13
"	27 "	142.9	36.99
"	28 "	143.5	37.95
"	29 "	144.4	38.23
"	30 "	144.8	39.01
"	31 "	144.9	38.94
"	32 "	145.8	40.14
"	33 "	146.1	39.92
"	34 "	146.7	40.20
"	35 "	147.6	39.10

第28表

身長、体重の対前年の増減

年 令	身 長				体 重			
	男		女		男		女	
	cm	対前年増減	cm	対前年増減	kg	対前年増減	kg	対前年増減
0才	65.4	+ 0.4	64.2	+ 1.0	7.44	+ 0.10	7.00	+ 0.15
1	77.9	+ 0.4	76.0	+ 0.4	10.27	+ 0.23	9.57	+ 0.06
2	85.7	- 0.2	84.3	- 0.3	12.20	+ 0.19	11.50	- 0.02
3	93.4	+ 0.5	92.6	+ 1.2	14.02	+ 0.14	13.58	+ 0.16
4	99.6	+ 0.6	98.5	+ 0.5	15.52	+ 0.08	15.04	+ 0.05
5	104.7	- 0.2	104.0	- 0.1	17.12	+ 0.18	16.51	- 0.17
6	110.8	+ 0.6	109.7	+ 0.1	19.01	+ 0.34	18.40	+ 0.14
7	116.7	+ 0.6	115.5	0	21.04	+ 0.30	20.58	+ 0.26
8	121.5	+ 0.3	120.6	0	23.28	+ 0.37	22.56	+ 0.10
9	126.6	+ 0.6	126.0	+ 0.6	25.64	+ 0.26	25.12	+ 0.28
10	130.8	0	131.7	+ 0.6	27.64	- 0.14	28.16	+ 0.50
11	135.9	+ 0.6	138.0	+ 1.5	30.48	+ 0.16	32.12	+ 0.90
12	141.0	+ 0.6	143.7	+ 1.5	34.18	+ 0.66	36.54	+ 1.16
13	147.6	+ 0.6	147.9	+ 1.2	39.10	+ 0.96	40.70	+ 0.54
14	153.6	+ 0.3	149.4	0	43.94	- 0.38	44.36	+ 0.16
15	158.7	+ 0.6	151.5	+ 0.3	49.44	+ 1.02	47.94	+ 0.58
16	161.1	+ 0.2	152.1	+ 0.3	52.76	+ 1.78	48.56	- 0.34
17	163.2	0	151.8	0	54.86	0	50.10	+ 0.78
18	162.9	0	152.4	+ 0.3	55.98	+ 0.66	49.78	- 0.38
19	153.2	+ 0.3	152.7	0	55.44	- 0.08	50.60	+ 0.10

第29表 成長に伴う身長増加

年 令	戦 前	昭和22年	昭和35年
	cm	cm	cm
0 ~ 1	11.2	11.0	12.5
1 ~ 2	8.6	8.1	7.8
2 ~ 3	6.8	6.7	7.7
3 ~ 4	6.2	6.0	6.2
4 ~ 5	5.6	5.5	5.1
5 ~ 6	5.7	5.4	6.1
6 ~ 7	5.4	4.7	5.9
7 ~ 8	4.9	4.4	4.8
8 ~ 9	4.5	5.3	5.1
9 ~ 10	4.6	4.0	4.2
10 ~ 11	4.6	4.2	5.1
11 ~ 12	4.9	3.9	5.1
12 ~ 13	6.2	5.0	6.6
13 ~ 14	8.5	5.2	6.0
14 ~ 15	4.6	6.5	5.1
15 ~ 16	2.5	5.3	2.1
16 ~ 17	1.5	3.3	2.1
17 ~ 18	0.7	1.2	0.3
18 ~ 19	0.1	0.8	0.3
19 ~ 20	0.2	0.6	—

注) 0~1才の身長増加量は1才の体位と0才の体位との差である。

分な発育をすることができなかったものが、その遅れをとり返すために14才以降になってもまだ伸びがみられるものと考えられる。

しかしその後は食糧事情の好転とともに年々若い年齢層における発育量が増加し、逆に10代の後半期における増加量が減って成長期が一般に早くなり始めた様である。

すなわち35年度成績では男子の場合いわゆる発育最盛期が戦前より1年、22年より2年早くなって12~13才の間に現われている。

この様に発育期が早くなったにも拘らずなお、わが国の青少年の体位は著しく向上しているが、今後国民の体位はどの位まで伸びるであろうか。たとえば戦後の傾向線にみられる体位の上昇は誠に素晴らしいものがあるが、これは一旦低下した体位をもとの状態に戻そうとする一種の回復現象であるので、今後このような状態が何年も続くとは到底考えられない。

この疑問に答える為に厚生省の栄養審議会では将来の日本人の体位はどうなるかについて種々検討を進めていたが、昭和36年4月20日付で、「将来の日本人の体位」について答申を行ない昭和45年における国民の体位推定値を発表した。

この推定体位は戦後の体位のすう勢と今後の見通しとを考慮し、10年後にはどのような体位になるかを算定したものである。

なお、この昭和45年の体位の推計値と昭和35年の体位とを比較してみると第30表にみられるとおり男女の身長、体重、ともに小児期ではあまり大きな伸びはなく、男子の身長で1.5~2.3 cm位、女子では0.5~2.1 cm位、体重においては最高1 kg位の差しか現はれないものと考えられている。しかしながら発育

第30表 国民栄養調査による昭和35年度の体位と昭和45年の推計値との比較

年 令	昭和45年の推計値 (a) 1)				昭和35年度の実測値 (b) 2)				(a) - (b)			
	身長(cm)		体重(kg)		身長(cm)		体重(kg)		身長(cm)		体重(kg)	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
0	66.9	64.7	7.7	7.1	65.4	64.2	7.4	7.0	1.5	0.5	0.3	0.1
1	79.4	77.1	10.6	9.9	77.9	76.0	10.3	9.6	1.5	1.1	0.3	0.3
2	87.6	85.9	12.8	12.1	85.7	84.3	12.2	11.5	1.9	1.6	0.6	0.6
3	94.8	93.2	14.6	14.0	93.4	92.6	14.0	13.6	1.4	0.6	0.6	0.4
4	101.1	99.6	16.3	15.7	99.6	98.5	15.5	15.0	1.5	1.1	0.8	0.7
5	107.0	105.7	18.0	17.4	104.0	104.0	17.1	16.5	2.3	1.7	0.9	0.9
6	112.7	111.3	19.8	19.2	110.8	109.7	19.0	18.4	1.9	1.6	0.8	0.8
7	118.4	116.9	21.8	21.3	116.7	115.5	21.0	20.6	1.7	1.4	0.8	0.7
8	123.6	122.5	24.0	23.6	121.5	120.6	23.3	22.6	2.1	1.9	0.7	1.0
9	128.8	128.1	26.4	26.0	126.6	126.0	25.6	25.1	2.2	2.1	0.8	0.9
10	133.5	134.7	29.0	29.2	130.8	131.7	27.6	28.2	2.7	3.0	1.4	1.0
11	139.0	141.3	31.9	33.8	135.9	138.0	30.5	32.1	3.1	3.3	1.4	1.7
12	145.2	146.9	36.0	38.7	141.0	143.7	34.2	36.5	4.2	3.2	1.8	2.2
13	152.3	150.6	41.1	43.8	147.6	147.9	39.1	40.7	4.7	2.7	2.0	3.1
14	158.4	152.4	48.0	47.5	153.6	149.4	43.9	44.4	4.8	3.0	4.1	3.1
15	161.9	153.4	52.4	49.4	158.7	151.5	49.4	47.9	3.2	1.9	3.0	1.5
16	164.0	153.9	55.1	50.4	161.1	152.1	52.8	48.6	2.9	1.8	2.3	1.8
17	165.4	154.1	57.0	51.1	163.2	151.8	54.9	50.1	2.2	2.3	2.1	1.0
18	166.2	154.2	58.1	51.6	162.9	152.4	56.0	49.8	2.3	1.8	2.1	1.8
19	166.6	154.1	58.8	51.8	163.2	152.7	55.4	50.6	3.4	1.4	3.4	1.2
20					161.1	151.5	55.6	50.1	5.4	1.6	4.0	1.8
21					162.6	151.5	55.6	50.3	3.9	1.6	4.0	1.6
22					162.9	151.8	56.4	49.9	3.6	1.3	3.2	2.0
23	166.5	153.1	59.6	51.9	163.2	152.1	57.0	49.7	3.3	1.0	2.6	2.2
24					163.2	151.5	57.6	49.7	3.3	1.6	2.0	2.2
25					162.9	151.5	56.1	50.0	3.6	1.6	3.5	1.9
26 ~ 29					162.3	150.9	56.5	49.1	4.2	2.2	3.1	2.8
30 ~ 39	165.1	151.7	59.5	51.3	162.0	150.3	56.5	49.4	3.1	1.4	3.0	1.9
40 ~ 49	163.4	150.2	58.7	50.8	159.9	149.1	56.1	50.2	3.5	1.1	2.6	0.6
50 ~ 59	161.7	148.2	57.3	49.4	158.7	147.0	54.7	48.1	3.0	1.2	2.6	1.3
60 ~ 69	159.9	145.4	55.1	47.0	156.3	144.3	52.3	46.0	3.6	1.1	2.8	1.0
70 ~	157.5	142.1	52.2	43.7	154.5	141.0	49.4	42.9	3.0	1.1	2.8	0.8

注 1 昭和36年4月栄養審議会答申

2 国民栄養調査

盛りの年齢層ではかなり著しい差が生じ特に男子では12~16才，女子では10~14才位までの思春期の発育が著しく男子では身長3~5cm，体重2~5kg，女子では身長は3.0cm前後，体重は2~3kg位伸びるのではないかと想像される。

このように今後10年間位の間思春期の年齢層での体位向上はかなり著しく，特に男子の15才以上，女子では13才以上の年齢層では現在より約1年間の身長伸びがみられることになる。

更にこの体位を諸外国と比較してみると，昭和32年におけるアメリカ生れの日本人二世の発育状況に近

第31表 アメリカ生れの日本人およびカナダ人の体位

年 令	アメリカ生まれの日本人 (1957年) 1)				カナダ人 1953年 2)			
	身 長		体 重		身 長		体 重	
	男	女	男	女	男	女	男	女
	cm	cm	kg	kg	cm	cm	kg	kg
5.0 才	108.4	105.8	19.6	17.7	106.4	106.2	18.1	18.6
6.0	112.4	110.9	20.6	19.7	113.3	112.3	20.9	20.0
7.0	117.8	118.5	23.7	23.2	119.4	118.1	22.7	22.2
8.0	124.1	123.6	27.1	26.6	125.7	124.2	25.9	25.9
9.0	128.9	127.0	30.7	27.4	130.3	129.5	28.6	28.1
10.0	132.0	134.2	30.9	32.3	135.9	135.4	31.8	31.3
11.0	140.2	139.8	36.4	37.9	140.7	140.5	34.9	34.9
12.0	145.9	145.2	40.2	40.0	145.8	147.8	38.1	41.7
13.0	153.4	150.5	48.1	47.7	150.6	153.4	42.6	46.3
14.0	159.3	152.9	50.9	46.9	158.0	155.7	49.0	48.5
15.0	164.5	155.3	57.7	51.4	164.3	158.0	54.0	50.8
16.0	167.5	154.5	63.5	52.1	—	—	—	—
16.5	—	—	—	—	169.4	158.8	61.7	54.4
17.0	166.7	154.8	63.3	52.4	—	—	—	—
18.0	169.2	154.2	66.4	52.1	—	—	—	—
18.5	—	—	—	—	172.7	159.0	65.3	56.2

注. 資料1) W.W. Grculich American Journal of physical Anthropology, 15, 489 (1957).

2) L.B. Petti American Journal of public Health, 45, 862 (1955)

い値となるが，西欧諸国の水準に比べればまだまだ見劣りがしている。従ってわが国にとってこの体位向上は非常に重要な問題であり，今後栄養改善，生活条件の改善，体育の普及などを一段と推進しより立派な日本人を造り上げる様な努力が必要である。

次に昭和35年度における体位の調査においては，新たに20代，40代，60代の三年令階級について性別，業態別(生産者世帯，消費者世帯，その他の世帯)，身長，体重，相関度数分布表を作成したが，これについて栄養審議会において種々検討した結果，昭和36年7月26日付で同会から「性別，年齢階級別，身長別体重について」の厚生大臣あて報告がなされた。

これは身長別の平均体重及び被調査者の80%が入るような上限及び下限体重を決めたものでこの範囲内に入るものは，一応現在の国民からすれば身長別の正常体重であると考えられるものである。従来普通の人の標準体重を表わす方法としては身長から100を引いたり，またはこれに0.9を乗じた数で現わしたものが多く使われていたが，これらの値が適当であるか否かは問題であり，各方面からも現状に適するものが要望されていた。今回栄養審議会が発表したものは現在の国民についてみた正常体重表であり，しか

身長別体重表の正常体重 (80%) およびその範囲外の者の比率
 年齢階級別身長別正常 (80%) 体重表 (男子)

身長 (cm)	体 重 (kg)								
	20 ~ 29才			40 ~ 49才			60 ~ 69才		
	下限値	平均値	上限値	下限値	平均値	上限値	下限値	平均値	上限値
139							35.8	42.1	48.4
140							36.3	42.7	49.1
141							36.8	43.2	49.6
142							37.3	43.8	50.3
143				38.0	44.6	51.2	37.8	44.4	51.0
144				38.6	45.3	52.0	38.3	45.0	51.7
145	40.1	45.4	50.7	39.1	45.9	52.7	38.8	45.6	52.4
146	40.6	46.0	51.4	39.7	46.6	53.5	39.2	46.1	53.0
147	41.2	46.6	52.0	40.3	47.3	54.3	39.8	46.7	53.6
148	41.8	47.3	52.8	40.9	48.0	55.1	40.3	47.3	54.3
149	42.3	47.9	53.5	41.5	48.7	55.9	40.8	47.9	55.0
150	42.8	48.5	54.2	42.0	49.3	56.6	41.3	48.5	55.7
151	43.4	49.2	55.0	42.6	50.0	57.4	41.8	49.1	56.4
152	44.0	49.8	55.6	43.2	50.7	58.2	42.2	49.6	57.0
153	44.5	50.4	56.3	43.8	51.4	59.0	42.7	50.2	57.7
154	45.0	51.0	57.0	44.3	52.0	59.7	43.2	50.8	58.4
155	45.6	51.6	57.6	44.9	52.7	60.5	43.8	51.4	59.0
156	46.2	52.3	58.4	45.5	53.4	61.3	44.3	52.0	59.7
157	46.7	52.9	59.1	46.1	54.1	62.1	44.8	52.6	60.4
158	47.2	53.5	59.8	46.6	54.7	62.8	45.2	53.1	61.0
159	47.8	54.1	60.4	47.2	55.4	63.6	45.7	53.7	61.7
160	48.4	54.8	61.2	47.8	56.1	64.4	46.2	54.3	62.4
161	48.9	55.4	61.9	48.4	56.8	65.2	46.7	54.9	63.1
162	49.5	56.0	62.5	49.0	57.5	66.0	47.2	55.5	63.8
163	50.0	56.6	63.2	49.5	58.1	66.7	47.7	56.0	64.3
164	50.6	57.3	64.0	50.1	58.8	67.5	48.2	56.6	65.0
165	51.1	57.9	64.7	50.7	59.5	68.3	48.7	57.2	65.7
166	51.7	58.5	65.3	51.3	60.2	69.1	49.2	57.8	66.4
167	52.2	59.1	66.0	51.9	60.9	69.9	49.7	58.4	67.1
168	52.8	59.8	66.8	52.4	61.5	70.6	50.2	59.0	67.8
169	53.3	60.4	67.5	53.0	62.2	71.4	50.6	59.5	68.4
170	53.9	61.0	68.1	53.6	62.9	72.2	51.2	60.1	69.0
171	54.4	61.6	68.8	54.2	63.6	73.0	51.7	60.7	69.7
172	55.0	62.3	69.6	54.7	64.2	73.7	52.2	61.3	70.4
173	55.5	62.9	70.3	55.3	64.9	74.5	52.7	61.9	71.1
174	56.1	63.5	70.9	55.9	65.6	75.3	53.2	62.5	71.8
175	56.6	64.1	71.6	56.5	66.3	76.1			
176	57.2	64.8	72.4	57.1	67.0	76.9			
177	57.8	65.4	73.0	57.6	67.6	77.6			
178	58.3	66.0	73.7						
179	58.8	66.6	74.4						
180	59.4	67.3	75.2						

注) 本資料は昭和36年7月26日栄養審議会報告による

第33表

年齢階級別身長別正常 (80%) 体重表 (女子)

身長 (cm)	体 重 (kg)								
	20 ~ 29才			40 ~ 49才			60 ~ 69才		
	下限値	平均値	上限値	下限値	平均値	上限値	下限値	平均値	上限値
128							29.4	36.3	43.8
129							29.8	37.1	44.4
130							30.2	37.6	45.0
131							30.7	38.3	45.9
132							31.2	38.9	46.6
133				33.6	40.8	48.0	31.7	39.5	47.3
134				34.1	41.4	48.7	32.1	40.0	47.9
135	36.8	41.2	45.6	34.6	42.0	49.4	32.6	40.6	48.6
136	37.1	41.6	46.1	35.0	42.5	50.0	33.1	41.2	49.3
137	37.6	42.1	46.6	35.5	43.1	50.7	33.5	41.8	50.1
138	38.1	42.7	47.3	36.0	43.7	51.4	34.0	42.4	50.8
139	38.5	43.2	47.9	36.5	44.3	52.1	34.4	42.9	51.4
140	39.0	43.7	48.4	37.0	44.9	52.8	34.9	43.5	52.1
141	39.4	44.2	49.0	37.4	45.4	53.4	35.4	44.1	52.8
142	39.9	44.7	49.5	37.9	46.0	54.1	35.9	44.7	53.5
143	40.4	45.3	50.2	38.4	46.6	54.8	36.3	45.3	54.3
144	40.9	45.8	50.7	38.9	47.2	55.5	36.8	45.9	55.0
145	41.3	46.3	51.3	39.3	47.7	56.1	37.2	46.4	55.6
146	41.7	46.8	51.9	39.8	48.3	56.8	37.7	47.0	56.3
147	42.2	47.3	52.4	40.3	48.9	57.5	38.2	47.6	57.0
148	42.6	47.8	53.0	40.8	49.5	58.2	38.7	48.2	57.7
149	43.1	48.3	53.5	41.2	50.0	58.8	39.2	48.8	58.4
150	43.5	48.8	54.1	41.7	50.6	59.5	39.6	49.3	59.0
151	43.9	49.2	54.5	42.2	51.2	60.2	40.0	49.9	59.8
152	44.4	49.8	55.2	42.7	51.8	60.9	40.5	50.5	60.5
153	44.9	50.3	55.7	43.2	52.4	61.6	41.0	51.1	61.2
154	45.3	50.8	56.3	43.6	52.9	62.2	41.5	51.7	61.9
155	45.8	51.3	56.8	44.2	53.6	63.0	41.9	52.2	62.5
156	46.2	51.8	57.4	44.6	54.1	63.6	42.4	52.8	63.2
157	46.7	52.3	57.9	45.1	54.7	64.3	42.8	53.8	64.0
158	47.1	52.8	58.5	45.6	55.3	65.0	43.3	54.0	64.7
159	47.6	53.4	59.2	46.0	55.8	65.6	43.8	54.6	65.4
160	48.1	53.9	59.7	46.5	56.4	66.3	44.2	55.1	66.0
161	48.5	54.4	60.3	47.0	57.0	67.0	44.7	55.7	66.7
162	49.0	54.9	60.8	47.5	57.6	67.7			
163	49.4	55.4	61.4	47.9	58.1	68.3			
164	49.9	55.9	61.9	48.4	58.7	69.0			
165	50.3	56.4	62.5	48.9	59.3	69.7			
166	50.8	56.9	63.0						
167	51.2	57.4	63.6						

注) 前表と同じ

もこれは時代とともに変わったり, また直接健康度と結びついたものではないが, 一応, 身長別体重の基準値となるものではないかと考えられる。

業態別発育状況

前段までは体位の全国的傾向について述べてきたが、更にこれを生産者世帯と消費者世帯に分けて観察してみよう。

まず身長、体重について対前年の増減をみると男子の場合は身長、体重とも生産者世帯と消費者世帯と

第34表

業態別体位の比較 (男子)

昭和35年度成績

年 令	身 長 (cm)		体 重 (kg)	
	消費者世帯	生産者世帯	消費者世帯	生産者世帯
0才	66.1	64.4	7.66	7.14
1	78.2	77.3	10.39	10.04
2	86.2	84.5	12.31	12.00
3	94.2	92.3	14.35	13.59
4	100.2	98.8	15.53	15.44
5	105.4	103.9	17.47	16.74
6	111.1	110.4	18.92	19.18
7	117.3	116.4	21.10	21.08
8	121.8	120.6	23.52	22.98
9	129.0	126.6	25.56	25.84
10	131.7	129.3	27.84	27.26
11	136.5	134.7	30.78	29.84
12	141.6	139.8	34.44	33.74
13	148.5	145.8	39.50	38.30
14	154.2	152.4	44.08	43.42
15	158.4	158.7	49.34	49.80
16	162.0	159.3	53.22	51.74
17	163.8	162.9	54.88	55.50
18	163.0	162.0	56.16	55.26

の両者を通じ全国的傾向と余り変りはない。

しかしながら女子の場合にあっては、生産者世帯で身長、体重とも前年に比べかなりの向上がみられる。たとえば10~17才の年齢における体重は1kg前後、特に13才では2kgも増加しており、その伸びは顕著なものがある。しかし消費者世帯においては女子の場合も余り大きな変化はない。

以上述べたように本年は、農村部の体位の伸びが、都市部の伸びを大きく上回り、従来著しく立遅れていた状態から漸く改善の傾向をみせている。

6. 歯 牙 異 常

1) 年次別発現率

国民栄養調査では栄養摂取状況調査と併せて欠損歯、う歯等の歯牙疾患にどれくらい罹患しているかを調査している。このうちう歯についてはその発生状態を年次別にみると年々増加の傾向にあり35年度成績では男子74.2%、女子78.5%で前年の男子71.9%、女子76.5%の有症率を大きく上回っている。

次に1人当りのう歯の数については男子5本、女子6本で31年から依然として変化がみられない。

ただしこのう歯の数については処置歯、未処置歯にわけて調査していないのでその内容の実態については